

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Group childcare has a positive impact on child development from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

集団保育は子どもの発達に良い影響を与える:エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名:宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:Scientific Reports

年:2024 DOI:10.1038/s41598-024-81343-9

筆頭著者名:金森 啓太

所属 UC 名:宮城ユニットセンター

目的:

共働きが増えていること、世界的に早期から家庭以外で教育やグループケアを行うことの利点が認識されてきていることから、世界全体で3歳未満の子供の保育施設への通園が増加傾向にある。幼稚園や保育園に早期から通うことが、児の認知、言語、運動、心理社会性といった発達に良い影響を与えることが報告されているが、このテーマに関する先行研究のほとんどは、幼児教育・保育の長い歴史を持つ欧米諸国からのものであり、日本では集団保育の早期利用が子どもの発達にどのような影響を与えるかについて現在でも議論が続いている。乳幼児を取り巻く環境は国や文化によって大きく異なるため、今回の研究で日本でも早期の集団育児が欧米諸国からの報告と同様に子どもの発達に良い影響を与えるのかを調査した。

方法:

生後6か月から1歳の間で保育園に通園を開始し、その後3歳まで継続して通園していた子どもを保育施設あり群(ばく露群)、調査期間で一度も保育施設の利用がないものを保育施設なし群(対照群)と設定した。主要評価項目は3歳時点でAges and Stages Questionnaires® (ASQ)-3がカットオフ値未満の対象者数とし、ピアソンのカイ2乗検定で比較した。また、子どもの発達との関連が既に示されている習い事の有無、家族構成、両親の学歴、世帯収入、母親の職業、スクリーンタイム、性別、母親の神経発達症の有無を共変量として多重ロジスティック回帰分析も行った。

結果:

参加者は39,894名で、ばく露群と対照群はそれぞれ13,674名と26,220名だった。5つの発達領域のいずれかでASQ-3がカットオフ値を下回った参加者の数は、生後6か月時点では2群間で差がなかったが、3歳時点では5つの領域すべてにおいてばく露群で有意に少なかった(コミュニケーション(2.1% vs 5.7%, $p < 0.001$)、粗大運動(3.8% vs 5.0%, $p < 0.001$)、微細運動(7.0% vs 8.4%, $p < 0.001$)、問題解決能力(5.6% vs 8.9%, $p < 0.001$)、個人社会スキル(1.7% vs 5.1%, $p < 0.001$)。また、多重ロジスティック回帰分析でも同様に有意な関連が認められた。

考察(研究の限界を含める):

早期に保育施設を利用することで、家族以外の他の子どもや大人との交流を通じて他者との関わり方を学ぶことが促され、さらに、様々な遊びを通して身体的な活動を行うことが運動能力の向上につながったと考えた。したがって、早期に保育施設を利用することに限定せず、多様な社会や人との交流、様々な経験をさせることが子どもの発達促進に重要な可能性がある。北欧を中心とした以前の研究でも同様の報告はあるが、国や地域、風習の違いによって環境が子どもの発達に与える影響は異なる可能性を考慮すると大規模なデータを使用して日本で行われた本研究は独創的であり、乳児や早期幼児の保育施設利用の社会的ニーズが高まっている日本において、インパクトのある研究結果と考える。本研究の限界として、2011年から2014年にリクルートした妊婦を対象にしているため、2024年現在の実態とは乖離がある可能性がある。

結論:

本研究では、早期の保育施設利用が3歳児の発達に肯定的な影響を与えることを示した。